

小酒井不木探偵小説選Ⅱ
目次

■ 創作篇

画家の罪？	2
呪はれの家	14
謎の咬傷 <small>かみきず</small>	35
通夜の人々	52
ふたりの犯人	71
直接証拠	86
愚人の毒	100
紅蜘蛛の怪異	116
稀有の犯罪	128
展望塔の死美人	141
『好色破邪顕正』	161
探偵戯曲 紅蜘蛛綺譚	197
<small>探偵小説劇</small> 龍門党異聞	212
* 手紙の詭計	249
外務大臣の死	262
催眠術戦	273

新聞紙の包	286
偶然の成功	295
姐己の殺人	305

評論・随筆篇

偶感二題	316
課題	319
作家としての私	321
匿名の手紙	323
陪審制度宣伝劇	326
少年時代の愛読書	329
探偵小説劇化の一経験	330
探偵文芸の将来	335
探偵小説の行くべき道	337
大衆文芸ものの映画化	339
名古屋スケッチ	341
ペンから試験管へ	347
『龍門党異聞』について	349

【編者解題】 阿部 崇	352
-------------	-----

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

画家の罪？

日本ではまだあまり知れ渡っていないが、名探偵サブリロー・ゴトー（後藤三郎）の名は欧州大陸で、誰知らぬものもない。しかし彼がどこで生れたか、いつ欧州へ渡ったかまたどんな教育を受けたかは、彼と親しく交際しているものでも、少しも知らない。あるものは彼がフランス人を父とし、日本人を母とした混血児であるといい、あるものは、彼が純粹の日本人だといっている。何しろ彼は、その顔つきが、髪こそ黒けれ日本人離れをしているのと、日本語の外に英、仏、独、露、伊、西等の国語を自由自在に話すので、ちよつと逢うと、フランス人かイタリア人かと思われぬからである。が、私は今、後藤三郎の伝記を述べるつもりはないから委しいことは

他日に譲って、彼が欧州諸国を遍歴して、各所で取り扱った探偵事件の一つをここに紹介しようと思うのである。ただ彼の風采を知りたいと思う人のために、彼が、モリス・ルブランの描いたルパンに似ているとだけ言っておこう。しかし、その性格はルパンとは違っているようである。次に述べるのは、ドイツのドレスデンに起った事件である。

八月十五日の夜、B街のあるホテルで、画家レヒネルの結婚披露が行われた。質素ではあったが、賑かな宴会が将に終ろうとしたとき、給仕人は一枚の名刺を持って来て新郎レヒネルに渡した。レヒネルは名刺の上に書かれた「後藤三郎」という文字を、驚いたような顔をして眺めていたが、

「今日はこういう訳で手が引けぬから、明日訪ねて下さいといってくれ」と、言った。

給仕人は立ち去ったが、暫くしてから、また名刺ももつて戻って来た。見ると、名刺の裏に、鉛筆で次の文句が記されてあった。

「グランド・ホテルの殺人事件について、是非御目にかかりとう御座います」

レヒネルは、花嫁を始め、その他の客に断って、ホー

ルへ出た。そこには後藤探偵が待っていた。

「私がレヒネルです」といって彼は名刺をながめ「後藤さんですね。いったいどういう御用で御座いますか」

「いや、大へん御邪魔を致します」と探偵は愛嬌の笑をうかべて言った。「せっかくの御目出度おめでたに御迷惑のほどは御察し致しますが、何分人殺しという重大なことですから……」

「それが私とどういふ関係がありますか」

「それは私にもまだわかりません。或あるは何の御関係もないかもしれません……時に御伺いしますが、あなたは数日前から、グランド・ホテルの二百十七号室に泊っておられたスウェデンのゴル男爵を御承知ですか」

「知りません」

「男爵は今日の午後二時十五分頃に、ホテルの居間でピストルで殺されなさいました」

レヒネルはこの言葉を聞いて、はつと思つたらしかつたが、何気ない風を装って言った。

「それは御気の毒なことです。けれど私はその人を少しも存じません」

「ところが今日、男爵は殺される少し前にあなたあなたの御宅へ電話をかけたのです」

「私のところへ？」レヒネルは驚いたような顔をして

言った。「それは間違いでしょう。たといそうとしても、男爵が死なれたのにどうしてそのことがわかりますか」

「男爵はホテルの自働電話を使われたのですから、交換局へ問い合わせました上、男爵の手帳をしらべましたところ、御宅の番号が書かれてあつて、しかも、今日、男爵が御宅へ電話をかけられたことがわかりました」

「たったそれだけのことで御訪ね下さつたのですか」

「そうです。その外には何の手がかりもありませんから」

「で、私はどうすればよろしいのですか」

「ほんの二十分間でよいですから、私と一緒に来て下さいませぬか。表に自動車が待たせてあります」

「グランド・ホテルへ行くのですか」

「そうです」

レヒネルは、ちらと隣りの食堂の方へ目をやってから、頭を横にふつた。

「それは残念ながら出来ません。警察からならばともかくですが……」

「私は警察の代りとして、ホテルの支配人から、頼まれたのです」と探偵は相手の言葉を遮って言った。「警察へ届けるとすぐ世間に知れてしまいますので、そうなるとホテルの大迷惑ですから、丁度、私が二三日前から、

この市へ来てSホテルに泊っていることを知って、支配人は私に事件を内々に依頼したのです。それにあなたは画家として評判の方ですから、あなたにとつても、内々にした方がよいだろうと思います」

「それはそうです」

「では一しよに来て下さいますか」

「参りましょう。しかしちよつと待つて下さい。お客にことわつて来ますから……」

グランド・ホテルの惨劇は、不思議にも、他のお客たちに少しも知れなかった。丁度昼食のしまい時で、客が皆居間に居なかつたのと、男爵の借りている室が三間になつていたので、誰もピストルの音を聞いたものがなかった。

探偵と画家とはいつて行くと、支配人は走り出して来て、二人を二百十七号室へ案内した。

「レヒネルさん、この人を御存じありませんか」

画家はしばらく長椅子の上の屍骸を見つめていたが、

「存じません」ときつぱり言つた。

「ボーイを呼んで下さい」と探偵は支配人に向つて言つた。

支配人が廊下へ出で、何やら大声で呼ぶと、小柄な、

活潑なボーイがいつて来た。

「君だね？ 男爵を一番しまいに見たのは？」

と探偵はボーイにたずねた。

「はあ」とボーイは答えて、ふと傍に立っている画家の顔を見て、驚いたような顔つきをした。「男爵は電話をおかけになつてから、自動車を呼んでくれと私に仰しやいました」

「男爵の電話をきいたかね」

「はあ、丁度料理場からエレヴェーターの方へ行くところでした、話のしまい際を少しきいただけです」

「何という言葉だつたね」

「『いよいよ期限がきたから、これから行くんだよ』と言つておきりになりました。何でも、大へん赤い顔をして怒つて見えました。それから、私に自動車をよんで来てくれと仰しましたが、都合が悪くて、十五分ばかりかかつて、やつと一だいい見つけて帰つて来ました」

「そしてすぐ男爵に知らせに行つたのだね。その時階段を走り上つて行つたかね」

「いいえ、エレヴェーターで行きました」

「それから君は二百十七号室の扉を叩いてみたが、返事がないのであけて見たら……」

「男爵が敷物の上に死んでおられました」

探偵はうなずいた。

「君はここに居られるこの人を、これまでに見たことがあるかね」

ボーイは瞬きをしながら、画家の顔をながめて、

「昨日ここへ見えな人です」ときっぱり言った。

探偵はレヒネルの方をちらと見てから、

「きつとそうかね」と念を押した。

「そうですとも。この人は昨日、私に名刺を出して、男爵へ取りついでくれと言われました」

「無論、名刺の上の文字を読んだらどうね」

「はあ」

「何という名だったね」

「ハンス・レヒネルと覚えています」

探偵は眉をしかめて、うつむいている画家の方に言い、「どうですか」とたずねた。

「覚え違いでしょう」

「そんなことはありません」とボーイは反対した。「私は、まだその外に男爵の話し声を少し聞きました。男爵は『レヒネル君、明日の二時まで待つてやる。もしそれまでに……』といわれました」

「よろしい。それじゃレヒネルさん、これでもう用は済みましたから、御送り致しますよう」

自動車に乗ってから、二人はしばらくの間黙っていたが、突然、後藤探偵はポケットから、一枚の折った紙を出して言った。

「私は男爵のポケットからこの手紙を見つけました。読んでみましよう。『一件の儀は何卒八月十五日まで御猶予に与りたく、午後正二時に御伺い致し、返却仕るべく候』。この手紙はこの通りタイプライターで書いてあって、署名がありませんけれど、これに御心当りはありませんか」

「私の書いた手紙ではありません」

探偵はそのまま黙ってしまったが、暫くしてから言った。「実は今日、私は職掌柄、御留守宅へ伺って、家宅搜索をしました。その結果この手紙の下書きを見つけましたよ。……おや、もう自動車がつきました」

レヒネルは、自動車の扉をあけ帽子を取って挨拶しながら重い足どりでホテルの方へ歩いて行った。

「あ、もし」と探偵は声をかけた。「何か私に御用があったら、明日十二時までにSホテルへ来て下さい……」

翌日、十一時少し過ぎにレヒネルは後藤探偵を訪ねた。彼の顔は死人のように蒼ざめ、目のまわりが黒くなっていた。

「一大事の御用でおいでになりましたようですね」と

探偵はたずねた。

「画家は力無さそうに椅子に腰を下して、小声で言った。
「仰せの通りです。実は白状に参りました。男爵を殺したのは私です」

「どういう動機で？」

「それは言えません」

「裁判廷は水を打ったように静まりかえった。今しも証人として、アレキサンダー・ヘルピングが呼び出されたのである。

「はい」といってヘルピングは証人席についた。

「証人はゴル男爵の秘書役であるか」と裁判長はたずねた。

「はい」

「八月十四日男爵は、ハンス・レヒネルという画家の訪問を受けたということであるが、証人はその人を知っているか」

「知っております。丁度私が男爵の手紙を筆記していたときにその人は訪ねて来られました。私は別室へ退きました。その時ちらと顔を見ました」

「ここに居る被告に見覚えがあるか」

ヘルピングは、被告席に居る画家をじつとながめてか

ら言った。「男爵を訪ねたのはこの人です」

「ホテルのボーイの話では、男爵と被告とが何か言い争ったということであるが、証人には何か心当りはないか」

ヘルピングはうつむいて頭を横に振った。

「よろしい。次はゴル男爵夫人！」

喪服を着た四十格好の婦人が証人席についた。

「証人に対して本官は誠に同情に堪えない。しかしこの場合、人の一命にかかることであるから心をしずめて返答してもらいたい。証人には、男爵を死に至らしめた原因について、何か心当りがないか」

男爵夫人は胸に手をあてて小声で言った。

「心当りはないことも御座いませぬ。丁度今から一年ほど前に、私は良人と共にアルプス地方へ旅行致しましたが、その時二人の若い女の方に同行して頂きました。そのうちの一人が、今、レヒネルさんの夫人となっておられるリнда・エーベルトさんでした……」

傍聴席の人々はこの言葉をきいて、一斉に緊張した。

「それは本官もはじめて聞いたことである」と裁判長も興味を覚えたらしい顔付をして言った。

「エーベルトさんは私の親しいお友達でした。ところが、妙なことから、不意にお別れせねばならぬようにな

りました。それは、私の誕生日に、良人が宝石のついた白金の前髪飾かみかざりを買ってくれたので御座います。ところが、ある日、それが突然化粧室からなくなりましたので、私以外に化粧室へはいるのはエーベルトさんだけです。私はそのことを打ちあげたので御座います。すると、エーベルトさんは顔を真蒼にして、それから一時間たたぬうちに、旅行をするといつて、私どものところを去ってしまわれました。そしていつも御一しよだったもう一人の女の方エヂス・ベルゲルさんさえ、置き去りにして行かれました。その当時、良人も私も、若い女の人の人になり勝ちな神経質のためだと思っておりましたところが、先日、良人がドレスデンのある宝石商をたずねました時、偶然そこに失った前髪飾がありましたので誰が売ったのかと訊ねましたら、驚いたことに、リンダ・エーベルトさんだったので御座います」

「それから男爵はどうせられたか」

「良人それからエーベルトさんの住所をさぐりました。するとエーベルトさんはレヒネルさんと婚約なさったことがわかりました。そこで色々交渉しましたら、二三日過ぎにレヒネルさんが見えまして、前髪飾を御返しすると言われたそうです。その時良人は八月十五日の午後二時までに返せばよし、さもなくば訴え出ると申しました

……」

裁判長はこの時被告に向って言った。

「男爵夫人の言葉に相違はないか」

「ありません」とレヒネルは小声で言った。

「被告の新夫人はその飾を、何程の価で宝石商へ売ったか」

「四万マルクです」

「被告はそれを買い戻そうとしたか」

「倍額を支払うと申出ました」

「ところが手に入らなかったのか」

「都合あしく、ある外国人に売りましたそうで、その外国人を探してくれましたが、わかりませんでした」

「すると、被告は、買戻しが不成功に終わったので、訴えられることを恐れて、男爵を殺したのか」

「そうです」

「よろしい。次に被告の新夫人を訊問する」

リンダ・レヒネルは、眼を泣きはらし、蒼い顔をして証人席に着いた。

「男爵夫人の証言によると、証人は前髪飾を当市の宝石商に売ったということであるが、それに相違ないか」

「私は飾を盗んだものではありません」

と彼女は小声で言った。

「証人が盗んだとは本官は言わない。ただ証人が、前髪飾の紛失をきいて、突然旅行をしたことと、前髪飾を四万マルクに売ったことについて、それが事実であるかどうかをたずねているのだ」

「それはどちらも本当のことで御座います。こう申し上げては或はお疑いになるかもしれませんが、実は、私も、男爵夫人が男爵から買ってもらわれました前髪飾と寸分もちがわないのでおつたので御座います。そして運悪くも私は、あの日にそれを売ろうと思つて、手提袋の中に入れていたので御座います。ところが、男爵夫人から、突然、飾がなくなつたことを聞きましたので、本当にびっくり致しました。これはきつと私に嫌疑がかかるにちがいないと思つて取るものも取りあえず、皆様と御別れしてしまいました」

裁判長は、彼女の言を信用しかねるといったような、顔つきをした。

「もし、そういう事情であつたなら、何故証人の良人は、男爵にその事情を告げなかつたか」

「無論良人はそれを申し上げたので御座います。けれど男爵は笑つて、そんな見え透いた嘘は通らぬよといつて取り合つて下さいませぬさうでした」

「証人が平素飾を持っていたことを誰か知っているも

のではないか」

「ありません。母が印度インドで買つて持つて来てくれましたもので、高価なものですから、めつたに着けることはなく、たつた一度パリでつけたことがありますだけです。そして母はもう死んで居りません」

「もしそうすると、証人の良人は誠に早まつたことをしたものである。しかし今は、飾の盗人を詮議するのが目的でなく、男爵を殺した犯人を明かにしなければならぬ。しかるに被告は加害者であることを自白したから、被告が犯人であることは最早疑う余地がない」

彼女は暫くうつむいて唇を噛んでいたが、やがて突然両眼から玉のような涙をこぼしたかと思つと、手巾ハンカチーフを取り出して顔を埋めた。

裁判長はその時大声で、

「これから、探偵サブロー・ゴトーの訊問にうつると言つた。

後藤探偵は廷丁に導かれて、静かに証人席に着いた。

すべての人の眼は一斉に彼の顔に注がれた。人々はかた唾つばをのんで、彼がどんな証言をするであらうかと、少なからぬ好奇心を持つて待ち構えた。

裁判長はにこにこして言つた。

「これまでの各証人の訊問によつて、既に加害者が決

定したのであるから、証人にはあまり多くの証言はあるまいと思うがどうであるか」

探偵はうなずいて言った。

「仰せの通り、あまり沢山申上げるとは御座いません。私の証言はたった一言で尽きます。それは、被告が犯人でないということでありませう」

裁判長を始め、陪審官も傍聴者も、悉く異様の眼を見はった。

「何、被告が犯人でない？」と裁判長は鸚鵡返しに言った。

「犯人でありません」

「証人はそれをどうして証明するか」

「それは容易なことです。被告は、裁判長の前にあるそのピストルをもって殺人を行いましたでしょう」

「勿論である」

「殺人は八月十五日の午後二時十五分頃に行われましてでしょう」

「それがどうかしたか」

「しかるに被告はそのピストルを八月十六日の午前十一時に、L街四十五番地の銃砲店で買いました。それ故、殺人の行われたときには、被告はまだピストルを持っていなかったのです」

裁判長は被告の方を向いて言った。

「被告は今の証言に対して、どういう申し分があるか」

「恐らく間違だろうと思います。銃砲店の人が、一日覚え違いをしたので御座いませう」

「決してそんなはずはありません」と後藤探偵は言葉が続けた。「丁度レヒネルさんがピストルを買われたときに銃砲店へ銀行から使者が来て金を置いて行つたので先方はよく覚えて居るのです。銀行でも調べてみました、たしかに八月十六日です」

「さすれば、銃砲店の主人と、銀行員とに尋ねたらわかるはずである」

「勿論、私はその二人を連れて参りました」

「それではその二人を訊問しよう」

二人は呼び入れられ訊問されたが、探偵の言に間違いないことを証言した。

裁判官はそれから当惑そうな顔をして言った。「只今の証言によつて、事情は聊か複雑になつてきたようである。被告がこのピストルを殺人の行われた後に買ったとすると、被告が加害者であることはよほど疑わしい。それにも拘わらず、被告はどこまでも犯人であると主張している。それには何か理由がなくてはならない。証人はそれについてどう考へるか」